

## 仙台国際音楽コンクールニュースレター

第5回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ヴァイオリン部門:2013.5.25(土)~6.9(日) ピアノ部門:2013.6.16(日)~30(日)

第5回仙台国際音楽コンクールピアノ部門優勝者・ソヌ・イエゴンさんの優勝記念演奏会が、昨年12月14日に日立システムズホール仙台で開催されました。今回のニュースレターでは、音楽評論家の萩谷 由喜子氏、青澤 隆明氏による公演のレポートをご紹介します。

### 第5回仙台国際音楽コンクール優勝記念演奏会 ソヌ・イエゴン ピアノリサイタルレポート

「覇者にふさわしい華麗な選曲と高度なテクニック」 萩谷 由喜子 (音楽評論家)



2013年6月に開催された第5回仙台国際音楽コンクールのピアノ部門の優勝者ソヌ・イエゴンの優勝記念リサイタルが同年12月14日、コンクール会場と同じ日立システムズホール仙台で開催された。ピアノはヤマハのCFX。

この晴れのステージの幕開けに彼が選んだ曲は、近代オーストラリア出身の作曲家パーシー・グレインジャーの『R.シュトラウス「薔薇の騎士」終幕から愛の二重唱による散歩』という華麗なコンサート・ピースである。卓越した技巧派ピアニストでもあったグレインジャーによるシュトラウス楽劇の編作品であるだけに、高度なテクニックが要求されるが、イエゴンは的確なタッチ選択によって鮮やかな演奏効果をあげていた。そもそも、この曲はコンサート会場で聴く機会もめずらしく、録音しているピアニストも多くはない。イエゴンがいついかなる場面でもこの曲と出会い、心を惹かれてこれをレパートリーに採り入れたのかはさだかではないが、その旺盛なレパートリー開拓精神にまず驚いた。

しかも、曲が終わるや起立とお辞儀なしに、そのままベートーヴェンのソナタ第30番ホ長調作品109へと続けた。このソナタは後期グループの中では規模も小さく、抒情味と優美な性格に貫かれている。イエゴンはそのこじんまりとした佇まいを先導するのにグレインジャーの華やかなトランスクリプションがふさわしいと考えてこの2曲を組み合わせただろうか。たしかに、いきなりベートーヴェンで始めるよりも、最初に明るく鮮烈な編作品で聴き手の耳を開いてから古典に回帰する曲順は大胆ながら新鮮味があり、なかなか頭脳的なプログラミングといえるだろう。そのベートーヴェンは、総じて速めのテンポで軽快に運ばれた。とはいえ、ペダルも細かく踏み分けられて、楽節楽句ごとに微細なニュアンスが表出され、味わいはゆたかである。

さて、前半最後の曲はラヴェルの『ラ・ヴァルス』。これも律動的なきびきびとしたテンポで進む。ラヴェル自身が「私はこの作品をウィンナ・ワルツの一種の神格化として構想した。私の心の中ではこの神格化に幻想的で宿命的な旋回の印象が結びついている」と述べているように、この曲はオーケストラで演奏されようともピアノ独奏版、あるいは2台ピアノ版であろうとも、舞曲としての性格が尊重されるべきであろう。イエゴンは前述した速めのテンポと達人なテクニックをもって曲と対峙した。だから、ヴィルトウオーゾ・ピースとして聴く楽しみは堪能できたが、欲を言えば、ワルツ本来の持つ優雅な舞曲としての性格とウィンナ・ワルツ独特のリズムをピアノでも表現できたら、さらに作品の真髄に迫れるのではなかろうか。また、付点リズムの刻みには研究余地があるかも知れない。

後半は、リストがシューベルト歌曲をもとに編作したトランスクリプション4曲を枕に置いて、シューベルトの大作『さすらい人幻想曲』で締め括るという粋な趣向である。この選曲と配列にも若いピアニストのセンスが光る。

歌曲を原曲とする4曲では『連禱』が出色。ここでイエゴンは歌曲のブレスを踏まえたフレージングによって、ピアノで歌えるピアニストであることを実証した。一方、『糸を紡ぐグレートヒェン』のピアノはヒロインの昂揚する鼓動を表わす刻みなので、たしかに上気して脈拍は速いには違いないが、やや押さえてもよいかと思った。『水に寄せて歌う』ももう少しじっくり歌ってもよいだろう。難曲の『魔王』の連打はよく決まっていた。

最後の『さすらい人幻想曲』は、89年生まれのイエゴンが今もっとも精度の高い澁利としたテクニックの絶頂期にあることを端的に物語っていた。

ことに、跳躍のテクニックは比類のない見事なもので、第一級のアスリートをみるような爽快感がある。ここまで技術を磨くには幼少期からの血の滲むような鍛錬の日々があつたに違いない。現在の彼は苦勞して手に入れたこのテクニックを武器として、難曲を鮮やかに、惚れ惚れとするような正確さで、バリバリと弾いてのける時期にある。それは、コンクール覇者のこの時期の特権として許されるものであろう。

ただし反面、次なるステップに彼がこれをどのように用い、その上に何を積み上げていくかも問われている。今後彼がいかなる変貌を遂げ、いかなる演奏を聴かせてくれるのか、頭脳派ピアニストでもあるだけに、楽しみにウォッチングしていきたい。

#### 第5回仙台国際音楽コンクール優勝記念演奏会 ソヌ・イエゴンピアノリサイタル

- ◆日時：2013年12月14日(土) 15:00開演
- ◆会場：日立システムズホール仙台 コンサートホール
- ◆プログラム：
  - ・グレインジャー/R.シュトラウスの「ばらの騎士」終幕から愛の二重唱による散歩
  - ・ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ 第30番 ホ長調 op.109
  - ・ラヴェル/ラ・ヴァルス
  - ・リスト/シューベルトの歌曲によるトランスクリプション  
糸を紡ぐグレートヒェン S558-8、連禱 S562-1、  
水に寄せて歌う S558-2、魔王 S558-4
  - ・シューベルト/幻想曲 八長調 D760「さすらい人幻想曲」  
～アンコール
  - ・リスト/「ラ・カンパネラ」
  - ・J.シュトラウス(グリュンフェルト編曲)/ウィーンの夜会 op.56
  - ・ショパン/ワルツ イ短調 遺作

## 第5回仙台国際音楽コンクール優勝記念演奏会 ソヌ・イエゴン ピアノリサイタルレポート

### 「安定と技巧の先に花ひらくもの」 青澤 隆明(音楽評論)

音楽家の長い人生のなかで、6か月という月日はどれだけの意味と重さをもつものなのだろう。コンクールで華々しい成果を上げ、新しい学びの場での躍進を期した24歳の青年にとってはさらなる飛躍の時節であるに違いない。

ソヌ・イエゴンはそうして、仙台の聴衆の前に帰ってきた。2013年12月14日、日立システムズホール仙台に、堂々のリサイタル・プログラムを携えて。ラヴェルの「ラ・ヴァルス」とシューベルトの「さすらい人幻想曲」は、第5回仙台国際音楽コンクールの予選でも披露した曲目だから、熱心な聴衆なら彼の進境をつぶさにみてとることもできたはずだ。客席は半分くらい入りであったが、子どもや学生を含めて、若い世代の聴き手が目立つ。

私自身とはいえば、3年前の第4回コンクールのときは、ピアノ部門の本選でヴァティム・ホロデンコの個性に期待を抱いたが、続く第5回はヴァイオリン部門のほうの本選を聴いた。ピアノ部門のことはやはり気になっていたが、上位入賞者を見れば、ピアノのほうは概して年齢が高い。第1位を得た韓国のソヌ・イエゴンは、8歳でピアノを始めて12歳でピアニストの道を決意、15歳でカーティス音楽院に留学したそうだが、これだけを聞くと、いわゆる神童ではなく、しっかりと自分の意志をもって着実に歩んできたように想われる。

この記念演奏会で、初めてソヌ・イエゴンの演奏を聴くのを、私は楽しみにしていた。プログラムは先の2曲を前後半の締めめに置くほか、ベートーヴェンのホルンソナタop.109にも臨み、リスト編のシューベルト歌曲を採り上げ、幕開けをパーシー・グレインジャーが編曲した「シュトラウスの『ばらの騎士』終幕から愛の二重唱による散歩」で華やかに彩るという、なんとも盛りだくさんで、欲張りな構成である。オペラの光景、そしてリートの世界をピアノで歌い上げて、前半と後半を始めるのは、他の曲にも示されるように奏者が高度な技巧を誇るだけでなく、ピアノで歌うことを重視した姿勢の表れだろう。ほんとうのヴィルトゥオーゾならば、手にした技巧をなんのために用いるかをしたたかに心得ているものである。さらに、ベートーヴェンやシューベルトには、秋から師事を始めたリチャード・グードが得意とする作曲家だけにいっそうの思いが加わっているかも知れない。

リサイタルはグレインジャーで始められた。きらびやかな高音をはじめ、艶やかな音をもって、技術的によく制御されている。語り口が落ち着いているのは頼もしく、こうしたレパートリーには不可欠のものだ。ピアノはヤマハのCFXだったが、イエゴン持ち前の安定した技巧と相性よく、整理された造型を響かせるのに効を奏していた。そのまま席も立たず、ベートーヴェンの後期ソナタop.109へと続けた。ここでも場面ごとの意図は明瞭で、表現をきちんと収める器量もあるが、作品内容を彼自身のものとして体感できているかというのはまた別の問題だ。クリアな音で軽快なテンポで運ばれるなか、細部の色づけも丁寧に心がけられたが、全体としては音楽が分節的になり、まだまだ建築途中の感は否めない。ラヴェルの「ラ・ヴァルス」は、舞踏的な旋回を優美に描くよりも、技巧的な躍進力で直線的に弾き進められるため、幻想や宿命を想像させる余地はすっきり明快に振り落とされてしまう。このアプローチをとる場合、奏者が強音に重厚な響きを乗せられないことも気になってくる。

リストによるシューベルト歌曲のトランスクリプションは、「糸を紡ぐグレートヒェン」、「連祷」、「水によせて歌う」、「魔王」の4曲。概して、透明な響きで滑らかに歌われるが、内面的な抒情や劇性を宿らせるには、表面的に流れすぎるきらいもあった。「魔王」での機敏な技巧に煽られるように、続いてはシューベルトの「さすらい人幻想曲D760」が締めくくり演奏された。軽快な指さばきで、高い技量を巧みに活かし、噛み合わせのいい音楽を潤滑に聴かせていった。変奏のイメージも、その実現もくっきりと明確である。

ただ、そうした技術的な達成が、なにを語りかけてくるかということが聴き手にはなにより大切で、その意味では冒頭のグレインジャーほどに余裕をもって伝えられるものは、あるいはべつの感情や迫真をみても、他の曲にはまだ十分に聴きとれなかった。ソヌ・イエゴン自身の主張が、現段階での技巧と統制のまとまりをふまえたうえで、より聴衆に訴えかける力をもつには、まだしばらくの時間がかかるかも知れない。今後の成長を期待しよう。始まりの光景はこうしてくっきり明らかになったのだから。



### 第5回仙台国際音楽コンクール優勝者公式記念CD

二人の優勝者のコンクールでの演奏を収録した公式記念CDが発売されました。

#### リチャード・リン (ヴァイオリン部門優勝)

- ・収録曲：  
ベートーヴェン：ロマンスト 長調 op.40  
バルトーク：ヴァイオリン協奏曲 第1番 Sz36  
ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.77

・指揮：パスカル・ヴェロ   ・管弦楽：仙台フィルハーモニー管弦楽団

・価格：各2,400円(税別)   ・発売元：株式会社フォンテック

・制作：公益財団法人仙台市市民文化事業団

#### ソヌ・イエゴン (ピアノ部門優勝)

- ・収録曲：  
モーツァルト：ピアノ協奏曲 八長調 K467  
ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第3番 二短調 op.30



【FOCD9612】



【FOCD9613】

